

俳句	作者	季語	季節
目には青葉山時鳥初鯉（めにはあおば やまほととぎす はつがつお）	山口素堂（やまぐちそどう）	青葉、時鳥（ほととぎす）、初鯉	夏
呼びかへす鮎売り見えぬあれかな（よびかえす ふなうりみえぬ あれかな）	野沢凡兆（のざわぼんちょう）	霰（あれ）	冬
閑かさや岩にしみ入る蝉の声（しずかさや いわにしみいる せみのこえ）	松尾芭蕉（まつおばしょう）	蝉	夏
病雁の夜さむに落て旅ね哉（びょうがんの よさむにおちて たびねかな）	松尾芭蕉（まつおばしょう）	雁（がん）、夜寒（よさむ）	秋
秋深き隣は何をする人ぞ（あきふかき となりはなにを するひとぞ）	松尾芭蕉（まつおばしょう）	秋深し	秋
旅に病んで夢は枯野をかけめぐる（たびにやんで ゆめはかれのを かけめぐる）	松尾芭蕉（まつおばしょう）	枯野	冬
行き行きて倒れ伏すとも萩の原（ゆきゆきて たおれふすとも はぎのはら）	河合曾良（かわいそら）	萩	秋
尾頭の心もとなき海鼠哉（おがしらの こころもとなき なまこかな）	向井去来（むかいきょらい）	海鼠（なまこ）	冬
両方に髭がある也猫の恋（りょうほうに ひげがある なりねこのこい）	小西来山（こにしらいざん）	猫の恋	春
梅一輪一りんほどのあたゝかさ（うめいちりん いちりんほどの あたたかさ）	服部嵐雪（はっとりらんせつ）	寒梅（かんばい）	冬
雨蛙芭蕉に乗りて戦ぎけり（あまがえる ばしょうにのりて そよぎけり）	榎本其角（えのもとときかく）	雨蛙	夏
淋しさの底ぬけて降るみぞれかな（さびしさの そこぬけてふる みぞれかな）	内藤丈草（ないとうじょうそう）	霰（みぞれ）	冬
うつす手に光る螢や指のまた（うつすてに ひかるほたるや ゆびのまた）	炭太祇（たんたいぎ）	螢	夏
牡丹散て打かさなりぬ二三片（ぼたんちりて うちかさなりぬ にさんぺん）	与謝蕪村（よさぶそん）	牡丹（ぼたん）	夏
朝がほや一輪深き淵のいろ（あさがおや いちりんふかき ふちのいろ）	与謝蕪村（よさぶそん）	朝顔	秋
憂きことを海月に語る海鼠かな（うきことを くらげにかたる なまこかな）	黒柳召波（くろやなぎしょうは）	海鼠（なまこ）	冬
やはらかに人分けゆくや勝角力（やわらかに ひとわけゆくや かちずもう）	高井几董（たかいきとう）	相撲	秋
のちの月葡萄に核のくもりかな（のちのつき ぶどうにさねの くもりかな）	夏目成美（なつめせいび）	後の月（のちのつき）、葡萄（ぶどう）	秋
山門を出れば日本ぞ茶摘うた（さんもんを でればにほんぞ ちゃつみうた）	田上菊舎（たがみきくしゃ）	茶摘み	春
九月尽遥に能登の岬かな（くがつじん はるかにのとの みさきかな）	加藤暁台（かとうきょうたい）	九月尽（くがつじん）	秋
しずかさや湖水の底の雲のみね（しずかさや こすいのそこの くものみね）	小林一茶（こばやしっさ）	雲の峰	夏
涼風の曲りくねつて来たりけり（すずかぜの まがりくねって きたりけり）	小林一茶（こばやしっさ）	涼風（すずかぜ）	夏
蟻の道雲の峰よりつゞきけん（ありのみち くものみねより つゞきけん）	小林一茶（こばやしっさ）	蟻、雲の峰	夏
いくたびも雪の深さを尋ねけり（いくたびも ゆきのふかさを たずねけり）	正岡子規（まさおかしき）	雪	冬
糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな（へちまさいて たんのつまりし ほとけかな）	正岡子規（まさおかしき）	糸瓜（へちま）の花	夏
日盛りに蝶のふれ合ふ音すなり（ひざかりに ちょうのふれあう おとすなり）	松瀬青々（まつせせいせい）	日盛り（ひざかり）	夏
金剛の露ひとつぶや石の上（こんごうの つゆひとつぶや いしのうえ）	川端茅舎（かわばたぼうしゃ）	露	秋

作者	作者生没年等
榎本其角（えのもときかく）	1661-1707、芭蕉の弟子、後に宝井（たからい）其角と名乗る。
加藤暁台（かとうきょうたい）	1732-1792、武士から俳諧師に転身。芭蕉の作風復興に努める。
河合曾良（かわいそら）	1649-1710、芭蕉の弟子、「おくのほそ道」の旅に同行、蕉門十哲の一人
川端茅舎（かわばたぼうしゃ）	1987-1941、高浜虚子に師事、「ホトトギス」同人
黒柳召波（くろやなぎしょうは）	1727-1771、漢詩を学んだ後に俳句を詠む。蕪村の弟子
小西来山（こにしらいざん）	1654-1716、西山宗因の門人
小林一茶（こばやし いっさ）	1763-1827、身近なことを詠む独自の作風を持つ。
高井几董（たかいきとう）	1741-1789、与謝蕪村の弟子
田上菊舎（たがみきくしゃ）	1753-1826、29歳で尼になり各地を巡る。琴、茶道、書画の名手
炭太祇（たんたいぎ）	1709-1771、江戸に暮らすが後年、京都の大徳寺の僧侶へ転身。与謝蕪村と交流を持つ。
内藤丈草（ないとうじょうそう）	1662-1704、武士から出家して芭蕉の弟子に。蕉門十哲の一人
夏目成美（なつめせいび）	1749-1816、江戸の商人、小林一茶の後援者
野沢凡兆（のざわぼんちょう）	生年不明-1714、京都の医者、芭蕉晩年の門人
服部嵐雪（はっとりらんせつ）	1645-1707、蕉門十哲の一人、武士から俳諧の宗匠（師匠）へ。
正岡子規（まさおかしき）	1867-1902、歌人、病床で俳句・短歌の革新に取り組み、「ホトトギス」を創刊
松尾芭蕉（まつおばしょう）	1644-1694、俳諧（俳句）を蕉風と呼ばれる文芸へと高め、多くの弟子を育てる。
松瀬青々（まつせせいせい）	1869-1937、「ホトトギス」に参加、関西俳壇の重鎮
向井去来（むかいきょらい）	1651-1704、蕉門十哲の一人、嵯峨野・落柿舎（らくししゃ）で暮らす。
山口素堂（やまぐちそどう）	1642-1716、漢学・書道・和歌・茶道などを学んだ後、芭蕉と親交を深める。
与謝蕪村（よさぶそん）	1716-1783、俳人、画家。南画の大成者